

## 家庭科における学び合いを充実するために

言葉を介した学び合いがめざすべきことは、G・H・ミードに倣えば、「社会的自己」の形成であろう。すなわち、他者との相互行為を通して、自分のなかに、自分を客観的に見る目をもつようになるということである。身近な他者の視点や役割を知り、自らのなかにそれを取り入れることで、自分が生きる世の中のルールや仕組みに気づき、そのなかで自己に期待されていることや役割を理解し、すべきことや振る舞うべきことが分かるようになることである。さらにミードに従って言うと、この自己の客観視の成立が、単に世の中に適応することを超えて、独自に世の中 一家庭科との関連で言えば日常生活一をより良くしていくことにつながる。

このような考え方に立った場合、学び合いなしは話し合いの指導に際しては、次のことが重要になると思われる。

- (1) 意見や考えを発表する際には、理由など考えの根拠も含めて明確に述べさせる（これによって、子どもたちのなかに自己と他者の考えの相違が際立つだろう）。
- (2) 子どもたちがうまく発言できない場合は、考えを明確にする言葉かけなどの教師の援助が必要となるだろう。
- (3) 子どもたち自身のやりとりのなかから、互いの意見の相違が明確になっていくのが望ましいが、難しい場合は、子どもに代わって、教師が考えの差異を明確にし、子どもたちに気づかせることが必要となるだろう。

また、学級全体での学び合いという研究全体のテーマを意識すれば、その深化のためには、次のことが重要となろう。

- (4) 各グループ活動の課題がそれぞれ別個であるより、統一されている方が良いであろう（それによって、各自が自分と関係のあるテーマであると認識し、積極的に他者の考えに耳を傾けるだろう）。
- (5) 学び合いや話し合いを散漫にせず、深化するためには、視点・観点を明確にした方がよいであろう（視点・観点は子どもの側から出てくることが望ましいが、出てこない場合には教師の側から整理し、提示することが必要となるであろう）。

小学校家庭科の実践事例「わたしにもできる！家族の仕事を見つけよう」の反省点としては、発表し合っても、「自分はこうしたい」といった主体的な姿勢が見られなかったということがある。この原因は、子どもたちの考えやその理由の表出が不明確で、それゆえ他者の考えにインパクトを感じられないため、自分の考えを改めて作り上げるということに繋がらなかったのではないか。今回の発表授業では味噌汁づくりを取り上げるが——「家族への思い」を軸にしなが、美味しい味噌汁を作る上での基礎・基本的な「コツ」を学級全体で気づき、共有することをめざす——、その発表活動においては、作り方の工夫の根拠を引き出すような発問を教師がするなどして、家族への思い（例えば、「野菜いっぱい味噌汁」にしたいのは、「お父さんが野菜不足だから」）を引き出すことを意識したい。それによって、他の子どもも「自分だったら、家族のためにどんな味噌汁にしたいだろう」と積極的に考えるのではないだろうか。小学校の構想では、特に上記の(1)～(3)を意識して授業を組み立てたい。

また、中学校家庭科の実践事例「箸入れをつくろう」では、話し合い活動が散漫になり、深まりに欠けるということが課題として残った。それは、班ごとに製作する箸入れの形が異なり、それゆえ工夫するポイントも異なっていたため、他班の発表を聞こうという積極的な姿勢が子どもたちのなかに出来なかったからであろう。したがって、商品の選択と購入をテーマとする今回の発表授業においては、特に上記の(4)(5)を意識した学び合いの設定を行いたい。

(共同研究者：島根大学教育学部初等教育開発講座 丸橋 静香)